



明治学院大学機関リポジトリ
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

| | |
|------------|--|
| Title | トニ・モリスンの『デズデモーナ』を通して考える 人種言説 |
| Author(s) | 森, あおい |
| Citation | 明治学院大学国際学研究 = Meiji Gakuin review International & regional studies, 50: 151-162 |
| Issue Date | 2017-03-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/10723/3009 |
| Rights | |

トニ・モリスンの『デズデモーナ』を通して考える人種言説

森 あおい

はじめに

アメリカ合衆国では民主主義が国家の理念として掲げられているが、アフリカから奴隷として連行されてきた人々またその子孫⁽¹⁾は、植民地時代から「人種上の他者」⁽²⁾ (Morrison, *Playing in the Dark* 46) としてみなされ、社会のマイノリティとして周縁化されてきた。法的には1964年に公民権法が成立し、人種、宗教、性、出身国を理由とする差別は禁止され、それまでの白人優位主義に終止符が打たれた。それから半世紀近くが経った2008年にはバラク・オバマが黒人初の大統領に選出され、一部のメディアでは「ポストレイシャル」な時代の到来という楽観的な報道も見られた。しかし、オバマが大統領に就任したからと言って、アメリカの人種主義が終わったわけではない。昨今メディアでも大きく取り上げられている白人警官による黒人青年の射殺事件など人種主義に根ざした事件は、人種的な不平等がいまだにアメリカ社会に蔓延していることを意味している。

人種の差異はアメリカ社会に大きな影響を及ぼしているが、人種とはそもそもどのように定義され、説明されるのだろうか。人種は近代以降の歴史において、長い間、遺伝的に受け継がれる身体的相違をもとに人間をいくつかの特徴的な集団に分類したものと考えられていたが、20世紀後半以降、このような考えは根拠のないものとして否定されてきている。最近の遺伝学研究では、人種は近代化が始まった15世紀以降、ヨーロッパ人の植民地主義の展開に伴い、異なった地域に居住する人々に対して押し付けられた、ある特定の態度や

信念を反映させた文化的構築物であり、生物発生的に見て性質が異なった人種は存在しないとされている⁽³⁾。つまり、身体的特徴によって人種を分類することはできないのだ。

それにも拘わらず人種主義に基づく白人優位のヒエラルキーが存在している理由を模索しているのが、アフリカ系アメリカ人女性として初めてノーベル文学賞を受賞したトニ・モリソンである。モリソンは、白人がマジョリティとして主流社会を形成するようになった近代以降の歴史を見直し、人種が社会のヒエラルキーを構成する重要な要素としてみなされ、白人優位の人種概念が支配的になったプロセスとメカニズムを、文学を通して解き明かそうと試みている。特に、1992年に出版された文学評論『白さと想像力』は、1990年にハーバード大学で行われた連続講義をもとにしたもので、歴史的・社会的に排除されてきたアフリカ系アメリカ人の存在を、アメリカ文学を代表するエドガー・アラン・ポーやマーク・トウェイン、アーネスト・ヘミングウェイ等の作品に見出している。アメリカ文学において不可視とされた「人種上の他者」の存在を読み解く『白さと想像力』は、モリスンの作品における人種概念を理解する上でも非常に重要な視座を提供している。

本論では、昨今のアメリカの人種問題を概観した上で、モリソンが『白さと想像力』で試みている「人種上の他者」の存在を浮き彫りにする手法を踏まえて、彼女の作品の背景にある人種言説を読み解く。特に、シェイクスピアの『オセロ』⁽⁴⁾の翻案として執筆されたモリスンの戯曲『デズデモーナ』に焦点を当てて、「人種が問題とはならない」(Morrison, “Home” 3) 世界の構築の可能性に

ついて、文字によるテキストだけではなく、音楽や照明の力を用いて見えない存在を可視化する舞台演出にも着目して論じていく。

1. アメリカの人種問題

1. レイシャル・プロファイリング

最近アメリカでは、レイシャル・プロファイリング⁵⁾による白人警官または白人自警団の黒人青年に対する暴力が、大きな社会問題となっている。この数年間を振り返っただけでも、2012年2月にフロリダ州サンフォードで、白人自警団のメンバー、ジョージ・ジーマンによって当時17歳だった黒人少年、トレイヴォン・マーティンが射殺された。さらに、2014年8月9日にはミズーリ州ファーガソンで18歳の黒人青年マイケル・ブラウンが白人警官ダレン・ウィルソンによって射殺された。いずれの場合も丸腰の黒人青年を射殺した白人は不起訴となっており、これらの判決に異議を唱える人々が、ソーシャルメディアを中心に「ブラック・ライヴズ・マター（黒人の命は重要だ）」等の抗議運動を起こし、全国的に大規模な展開を見せている。

このような抗議運動にも拘わらず、白人警官による暴力的なレイシャル・プロファイリングは後を絶たない。2016年7月5日には、ルイジアナ州バトンルーージュで37歳の黒人男性アルトン・スターリングが白人の警官2人に取り押さえられた上、至近距離から発砲されて殺された。続く7月8日にはミネソタ州ファルコンハイツで32歳の黒人青年フィランド・カスティールが、後部ライトが壊れていた車を運転していたため警官に呼び止められ、求めに応じて免許証を出そうとしたところを撃たれて死亡した。しかも、これらの事件は氷山の一角に過ぎない。

黒人政治の研究者であるテイラーは、アメリカ司法省が実施した、ペンシルヴェニア州フィラデルフィアで2007年から2013年の間に起きたレイシャル・プロファイリングに関連する調査結果を詳細に分析している。テイラーによれば、この6年間にフィラデルフィアだけでも、白人警官によ

る黒人への発砲事件が382回起きている。しかも、黒人を狙撃した白人警官が罪に問われたのは、382件中88件のみである（Taylor 3）。残りの294件、つまり77パーセントは不起訴となっており、白人警官の暴力をアメリカの司法制度が容認している実態が窺える。アルトン・スターリングとフィランド・カスティール殺害事件についての裁判はこれからであるが、過去の判例を見ると、加害者の白人警官が無罪になる可能性が非常に高いと言わざるを得ない。

白人による黒人に対する暴力は、今に始まった話ではない。アメリカの歴史を振り返れば、建国以前の植民地時代から、黒人たちは常に白人の暴力に晒されてきた。奴隷制時代には、黒人奴隷は白人主人の「動産」として「所有」され、彼（女）たちの命も主人の一存で奪われることがあった。南北戦争終結後には、奴隷制の廃止に不満を持った南部の白人至上主義者によって結成された秘密結社クー・クラックス・クランが、黒人排斥をもくろみ、数々の残虐なリンチ事件を起こした。さらに公民権運動の時代には、白人と平等の社会的権利を求めて抗議活動に参加した非暴力の一般市民に対して警察が公然と暴力を振るっていた。アメリカの歴史は、「人種」の差異による抑圧の歴史と言っても過言ではないだろう。

2. オバマ大統領の誕生とポストレイシャルに関する議論

(1) 黒人大統領と民主主義

人種の問題は、これまでアメリカに大きなしこりを残してきたが、バラク・オバマの大統領就任をきっかけとして、人種の問題について新たな議論が巻き起こった。オバマは、カンザス州出身の白人の母とケニア生まれの黒人の父の間に生まれ、両親の離婚後は、白人である母や母方の祖父母と暮らしており、白人文化の中で育ったとも言える。しかし彼は自らの人種を黒人ととらえており、メディアもアメリカ建国以来初のアフリカ系アメリカ人の大統領の誕生を「ポストレイシャルな時代の幕開け」として大きく取り上げた。

オバマもアメリカが民主主義を標榜する上で、

黒人としてのアイデンティティを持つ自分が大統領に選ばれたことの重要性については十分に認識していたと考えられる。大統領就任が決定した2008年11月4日にシカゴで行われた勝利演説の中で、オバマは次のように述べている。

アメリカは、あらゆることが可能な国です。それをいまだに疑う人がいるなら、今夜がその人たちへの答えです。建国の父たちの夢がこの時代にまだ生き続けているかを疑い、この国の民主主義の力をいまだに疑う人がいるなら、今晚こそがその人たちへの答えです。(Obama, “Victory Speech”)

アメリカの「独立宣言」では、「われわれは、自明の真理として、すべての人は平等につくられ、造物主によって、一定の奪いがたい天賦の権利を付与され、そのなかに生命・自由および幸福追求のふくまれることを信ずる」と謳われており、人間としての基本的権利、つまり、民主主義の根幹をなす、人民がすべて平等だとする理念が示されている。しかし周知のとおり、独立宣言が発布された当時「すべての人々」とは白人男性をさしており、アフリカ系アメリカ人、アメリカ先住民などの有色人種や女性は排除されていた。オバマは、アメリカの民主主義が白人男性に限定されているわけではないことを証明し、アメリカン・ドリームの可能性が人種を問わずすべてのアメリカ人に付与されていることを体現する存在となった。

(2) ポストレイシャル議論の背後に潜む人種差別

トニ・モリスンは、オバマの大統領就任に大きな期待を寄せた一人であった。オバマの大統領就任式に出席したモリスンは、しばし興奮状態にあったと『ガーディアン』紙に掲載されたエマ・ブロックスとのインタビューで述べている。

・・・バラク・オバマの大統領就任式に出席したときは、とても力強く愛国心を感じたものです。子どものようにね。海兵隊や星条旗が、ふだんは目を向けることもないのですが、突如、素晴らしく見えたのです。価値があるもののように・・・もともと

それも数時間のことでしたけれどね。でも私は自分でも驚きました。「神よ、アメリカを祝福したまえ (“God Bless America”）」のことは、ふだんはくだらない歌で、美しいなんて思ってもいなかったのですが、ほんの少しの間だけ素晴らしい曲に思えたのです。(“Toni Morrison”)

モリスンは、オバマが大統領候補に指名されたときに、彼を支持する手紙⁽⁶⁾を公開しており、オバマの当選に心を躍らせたのも当然のことと言えるだろう。しかし、それも長続きはしなかった。なぜならオバマが当選しても人種差別がなくなるわけではないことを彼女は知っていたからである。

モリスンは、前述のブロックスとのインタビューで、共和党議員リック・サントラムが、大統領再選をめざしていたオバマのことを、無意識に差別語である「ニガー」と呼びかけたことを指摘している。サントラムはそのような事実はないと否定しているが、モリスンはサントラムの言動から、昨今、人種差別は直接的な表現ではなく、暗号化されているのだと述べている。

彼ら[白人]は、暗号化された単語を使うのです。先日、リック・サントラムが、「ホワイトハウスにいるあいつ[オバマ]は、政府のニグーアー[「ニガー」と言いかけたと思われる]だ」と言ったことに、皆さん気づきましたか？

ええ、彼は口がすべったと言っています・・・彼は、そんなことは言っていないと言いました。かつては、郵便局などの政府関連の仕事についていた黒人は、「政府のニガー」と呼ばれていたのです。サントラムが言いかけたのは、それですよ。(“Toni Morrison”)

南北戦争後の再建期には、黒人に対しても公務員や政治家への門戸が開かれた⁽⁷⁾。しかし、それを社会全体が容認していたというわけではなく、批判的な立場の白人は、そのような黒人を「政府のニガー」と呼んで蔑んでいたのだ。モリスンはサントラムの失言に言及しながら、南北戦争が終

わってから1世紀半がたっても、その時代と変わらない人種意識を持った人々が存在していることを明らかにしている。

シェルビー・スティーブルも、初の黒人大統領誕生に期待を寄せる一方で、黒人の大統領が選出されたからと言って、人種問題がそう簡単に改善されるわけではないことを『ロサンゼルス・タイムズ』に掲載された記事の中で指摘している。

大部分のアメリカ人のように、私はオバマ大統領が前進していくのを見たいと思います。しかし、より大きな現実的な問題は、オバマ大統領の栄光のもとでも存続すると思われる、黒人と白人のアメリカ人のあいだの大きな相違です。黒人の私生児の割合は、70%です。黒人は、SAT⁽⁸⁾の試験で、1990年よりも2000年のほうが、成績が下がっています。我々[黒人]は人口のわずか13%を占めるにすぎませんが、アメリカ連邦政府の刑務所にいる囚人の55%は黒人です。黒人と白人間の学業成績のギャップは、黒人の中流階級のあいだにも存在します。このような格差から、黒人は劣っているものとして非難され、また、白人は人種差別的だと非難され続けることになるでしょう。(Steele)

このように現実を見据えた悲観的な見方は、アメリカにおける人種問題の深刻さを物語っている。アフリカ系アメリカ人が置かれている厳しい家庭環境や白人との教育格差、また人種差別的な刑務所制度の実態を考えれば、黒人の大統領が誕生したからと言って、楽観的に喜んではいられない。いまだにアメリカでは人種の違いによる差別が歴然と存在しているのだ。

II. 人種概念の再考

1. 「人種が問題にならない世界」の模索

トニ・モリスンは、「ホーム」というエッセイの中で、人種差別がなくならないアメリカの現状を以下のように表現している。

私は、そして私たちの中の誰もが、人種が問題とは

ならない世界に住んだことなどありません。……人種が関係ない世界は、理想郷、千年至福王国であり、救世主によってもたらされるか、あるいは、自然公園のような保護区でのみ可能な状態としてとらえられてきました。(Morrison, “Home” 3)

モリスンは、アメリカ社会から人種主義がなくならないことを認めたくて、その白人優位の価値観が決して歴史的に見て普遍的ではないことを作品を通して明らかにしようとしている。彼女が描き出すのは、西洋文明が白人至上主義を追及していく中で抹消されていったアフリカの文明や歴史を回復させることができる「人種が問題とはならない世界」である。現実の世界では、「人種が問題とはならない世界」は存在しないかもしれないが、モリスンは言葉の力を用いて、多様な人種の個性を尊重する一方で、人種差別的な要素を取り除いた世界を築こうとしている。

2. 『デズデモーナ』執筆のきっかけ

『デズデモーナ』は、イギリスが領土拡張をもくろみ植民地主義を推し進め、「大英帝国」の発展と繁栄をめざした時代に形成された人種概念を見直している。この作品は、2003年にニューヨークでモリスンと、カリフォルニア大学ロサンゼルス校芸術・文化学部教授でオペラ、演劇、映画の演出家として知られるピーター・セラーズが、昼食をともにしながらシェイクスピアの『オセロ』について論じたときの会話をきっかけとして生まれた。セラーズが、この作品は「デズデモーナが単純すぎるくらい善人で人種的感覚が絶望的に古い」と酷評したのに対し、モリスンがそれを否定し、自分ならもっと面白い『オセロ』を作り出すことができると挑戦的に答えたのである(Sciolino)。こうして、モリスンの手により、シェイクスピアの作品では周縁化されていたアフリカの存在、そして女性の存在を中心に据えた戯曲が誕生した。

『デズデモーナ』の上演にあたっては、モリスンとセラーズに、アフリカのマリ出身の新進気鋭の歌手であり役者のロキア・トラオーレが音楽担当として加わり、2011年5月にオーストリアの

ウィーンで初演を迎えた。その後、ベルギーのブリュッセル、フランスのパリ郊外、アメリカのパークレー、ニューヨーク、ドイツのベルリンで上演され、2012年にはロンドンで、そして2015年にはロサンゼルスでも上演され、好評を博した。

3. シェイクスピアとアフリカ

(1) アフリカの可視化

デズデモーナがオセロに殺された死後の世界で展開されるモリスンの『デズデモーナ』では、物語の進行の鍵を握るのは、デズデモーナの母ブラバンショー夫人の乳母だったアフリカ出身のバーバリーである。シェイクスピアの『オセロ』では、バーバリーの名前の言及はあるが、彼女が舞台で姿を見せることはない。しかし、モリスンは、『デズデモーナ』においてバーバリーを、その名前の由来⁽⁹⁾のゆえに、アフリカを象徴する存在として可視化し、舞台に登場させている。

舞台の中心がヨーロッパのヴェニスからアフリカ、そして現世を越境して死後の世界へと移行する『デズデモーナ』を読み解くにあたって、まずは、シェイクスピアが、アフリカをどのように認識していたのかを確認したい。ピーター・セラーズは『デズデモーナ』の序論で、シェイクスピアとアフリカの関わりについて以下のように説明している。

シェイクスピアにとってのアフリカの現実とは何だったのでしょうか。自分の劇場を「グローブ座」と呼んだ男は、明らかに、アフリカに興味を抱いていました。そして、ヴェニスを舞台として展開される二つの「多文化的」な芝居、『オセロ』と『ヴェニスの商人』はアフリカへの言及で溢れています(Sellers 7)。

シェイクスピアが活躍した16世紀後半から17世紀初頭にかけては、イギリスが国境を越えて植民地主義の拡大をもくろんだ時代であり、遠くはアフリカにまで支配を広げようとしていた。当然、シェイクスピアがアフリカのことについて見聞きするチャンスも数多くあり、アフリカに興味を抱ききっかけとなったと考えられる。そのことは、

『オセロ』に、主人公のオセロ、そして、デズデモーナの乳母バーバリーという二人のアフリカを想起させる登場人物が描かれていることから読み取れる。

(2) ムーア人の外交使節と『オセロ』の繋がり

生涯アフリカを訪れることがなかったシェイクスピアは、どのようにしてアフリカに関する知識を得ることになったのだろうか。特に、『オセロ』というアフリカのムーア人をモデルとした作品を書くきっかけは何だったのだろうか。その鍵を握るのが、1600年にアフリカのバーバリーからロンドンに派遣された外交使節団だったと言われている。ピーター・セラーズはその使節団のイギリス訪問について以下のように述べている。

1600年にバーバリー海岸から外交使節団の一行が、ロンドンに到着しました。彼らは、アフリカの政府の高官で、すばらしい衣装を身に付けていました。彼らは、エリザベス女王と取引をしようとしていたのです。このことは、ロンドンでは大きな議論を引き起こしました。(Sellers 8)

このときの外交使節団のメンバーの一人が、「勇敢なムーア人」として肖像画に描かれている(図1)⁽¹⁰⁾。この絵のモデルとなったのは、モロッコの大使、アブド・エル・オウアヘッド・ベン・メサウドで、モロッコのムーライ・アハマド・アル・マンスール王の首席事務官を務めていた。

彼は、マンスール王によってイギリスと同盟を結ぶためにエリザベス女王のもとに派遣された。ハリスによれば、当時モロッコの支配者は、西インド諸島の支配をめぐるスペインに対抗して戦うためにイギリスと手を組もうとしていた(Harris 26)。エリザベス女王は、イスラム圏のアフリカの異教徒との連帯に躊躇しないわけではなかったが、スペインに対抗するためにこの計画に興味を示し、一行を歓待した。しかし、あいにく、エリザベス女王、そしてマンスール王もその後しばらくして亡くなったため、この同盟が実現することはなかった。

図1 アブド・エル・オウアヘッド・ベン・メサウドの肖像画 (“Abd el-Ouahed ben Messaoud, Moorish Ambassador to Queen Elizabeth”)



所蔵：パーミンガム大学 (public domain)

このムーア人の使節団は、おそらくイギリス人からは、彼らの異なった宗教、文化、社会的慣習、そして身体的な特徴のために、エキゾチックな存在として見られ、「他者」としてみなされていたかもしれない。しかし、だからと言ってこれらの相違のために、彼らが差別されたり、忌避されたりすることはなかった。イギリスで彼らは政府高官にふさわしい尊敬を受け、丁重にもてなされたと言う。つまり17世紀初頭のイギリスでは、ムーア人は、人種の違いから差別されることもなく、政治や交易においてイギリスと対等なパートナーとなりうる存在だったのだ。

シェイクスピアの『オセロ』は、その作品が書かれた時代のイギリス人の人種意識を反映しており、オセロは人種的他者として排除されるのではなく、優秀な将軍として描かれている。ロウによれば、ルネサンス期のヨーロッパでは、アフリカ出身の兵士が戦場での勇敢な戦いぶりのために評価されており、傭兵として活躍していた (Lowe 33)。このことから、戦場で目を見張るような手柄を立て、勇敢な武将として描かれている黒人の武将オセロのような存在が、決して例外的だったわけではないことがわかる。しかしこの事実は、大英帝国の成立とともに、自分たちの侵略を正当化するために植民地の黒人の肌の色に「劣等」とい

う意味を付与した白人たちによって、書き換えられていったのだ。

デイリーダーが指摘するように、『オセロ』の舞台演出においても、白人が主流社会を形成するようになると、オセロの妻殺しの残虐さが彼の肌の色と結びつけられるようになり、オセロは、「暴力、セクシュアリティ、性的な満足を求める肉体、悪魔」を意味するようになった (Daileader 185)。このようにオセロを悪役とする演出は、アフリカが搾取され、その存在がヨーロッパ中心主義のもと、表舞台から抹消されるようになった植民地主義の歴史を反映していたのだ。

4. バーバリーの主体性の回復

バーバリーは、シェイクスピアの時代には、北アフリカのバーバリー海岸（現在のチュニジア、リビア、モロッコそしてアルジェリア）を意味する言葉だった。つまり、ブラバンショー夫人やデズデモーナは自分の召使の本名を無視し、その出身地を表すバーバリーという記号で呼んでいたのだ。

モリスンの『デズデモーナ』では、バーバリーが自分の本名を回復するプロセスが重要なテーマの一つとなっている。死後の世界でデズデモーナと再会するバーバリーは、友人面するデズデモーナを咎める。バーバリーを「親友だった」と呼ぶデズデモーナに対し、「私はあなたの奴隷だった」(45)と言り返し、表面的に従順さを演じざるをえなかった自分の境遇を理解していなかったデズデモーナの驕りを指摘する。また、バーバリーは、本当の自分の名前は、サランだったと明かし、自分の本名すらも知らないナイーヴなデズデモーナを糾弾する。

あなたは、私の名前さえもしらないということよ。バーバリーですって？バーバリーはあなたがアフリカのことをさすときの言葉よ。バーバリーは外国の地理、つまり野蛮人ということ。バーバリーですって。バーバリーはどんな犠牲を払ってもやっつけなければならない、ずるがしこくて邪悪な敵に等しいのよ。この敵は征服者の楽しみのために押さえつけ

ておくものなのよ。バーバリーは、こういった人々の名前なのよ。この人たちなくしては決して生きること、繁栄することできないのね。(45)

バーバリー／サランは、バーバリーという名前を与えられた経緯を、16～17世紀のヨーロッパとアフリカの権力構造の文脈で明らかにしている。当時のヨーロッパの支配者たちは、植民地政策のもとアフリカの人々を「野蛮人」すなわち、征服すべき「他者」としてとらえ、アフリカから搾取した資源によって富を蓄えていた。サランが本来の名前を奪われ、バーバリーと呼ばれるようになった背景には、支配者が植民地政策を進める上で、被支配者の名前、ひいては言語を奪い、自分たちにとって馴染み深く都合のよい西洋的な名前(記号)を付与した歴史的な背景があるのだ⁽¹¹⁾。バーバリーは自分の名前を主張することによって、植民地主義の支配から自己を解放し、主体性を回復することが可能になる。

一方デズデモーナは、アフリカ出身のサランの名前の由来を理解し、彼女の話に謙虚に耳を傾け、二人の間にあった主従関係を見直すことで、彼女との和解を果たそうとする。夫に殺められたデズデモーナと、恋人に捨てられて自殺したバーバリー／サランは、ともに男性に抑圧された体験を共有することで、人種、階級を越えて連帯し、男性中心的な構造から解放される可能性が示される。

5. 支配構造とジェンダー

(1) 女性の主体性の回復

モリスンの『デズデモーナ』で描かれているデズデモーナは、白人優位主義の価値観ではアフリカ出身のバーバリー／サランより優位な立場に置かれているが、男性中心的な社会では抑圧された存在である。しかし、『デズデモーナ』の冒頭のデズデモーナの語りでは、男性によって押し付けられた女性の領域を越境しようとする強い意志が強調されている。

ブラバンショー夫妻が娘につけたデズデモーナという名前は、「不運な、不幸な」を意味するギリ

シャ語だが、デズデモーナがその名前の意味を自ら変えようとしている様子が以下の場面から窺える。

私の名前はデズデモーナ。デズデモーナというこの言葉は惨めさを意味します。不運という意味もあります。運の尽き、という意味もあります。もしかしたら、両親は私が生まれた瞬間に、私の運命がどうなるかもう考えているか、想像していたか、わかっていたのかもしれませんが。もしかしたら、両親には、私が女の子に生まれたことだけで、私の人生がどのようになるか予測するのに必要なことすべてがわかってしまったのかもしれませんが。つまり、年長者たちの気まぐれと、男達の思うがままに支配されてしまうということが……。それが普通だった、いや、私が少女だった頃ヴェニスではそれが女性の義務だったことは確かです。男が規則を作り、女性がそれに従っていました。一歩足を踏み外すだけでじっさい運の尽きだったし、誰も救ってくれない惨めな人生に陥ってしまうのです。両親はこの制度のことをよくわかっていて認めていたから、娘の将来がはっきり予想できたのです。

でも両親は間違っていました。この制度のことはわかっていても、私のことはわからなかったのです。

私は、自分で選んだわけではない名前の意味通りになる女ではありません。(13-14)

デズデモーナの語りは、家父長制の掟を破った女性は、「惨めな人生に陥ってしまう」ことを彼女が自覚していたことを示している。しかし、デズデモーナにとっては、結果の如何に拘わらず、主体性を奪われて従属的な生き方をするよりも、主体的な生き方をするほうが重要だったのである。デズデモーナは男性中心的社会では抹消されるが、彼女の自己追求は死後の世界でも継続する。「悲しみ」を乗り越えて、自分の人生を語るデズデモーナからは女性の自立を読み取ることができる。

(2) 差異を超越した女性の連帯

モリスンは、さらにシェイクスピアの『オセロ』には登場しないオセロの母ソウンと、デズデモーナの母ブラバンショーフ夫人の出会いの場面を想像／創造し、差異を超越した女性の連帯を描いている。二人はそれぞれ子供を亡くした母として死後の世界で出会うが、オセロに娘を殺されたブラバンショーフ夫人からすれば、ソウンは娘の仇とも言える男を産んだ女性である。しかし、一方でオセロはデズデモーナを嫉妬に狂って殺害したあと、策略にはめられたことを知り自害しており、ソウンもブラバンショーフ夫人もともに子供に先立たれている。二人は、敵対するのではなく、子を亡くした悲しみを共有することで、お互いを理解しあうようになる。

ヴェニス貴族であるブラバンショーフ夫人とアフリカに出自を持つと考えられるソウンは、人種ばかりでなく、宗教も異なっている。前者は、聖母マリアに祈っていることからキリスト教を信仰していることが分かるが、ソウンはキリスト教の唯一神ではなく、アフリカの多神教の神々を信仰している。二人は宗教的な違いにも拘わらず、ともに祭壇を設え、祈りを捧げる。二人の間の宗教的な対立を越えた歩み寄りには、現代社会に欠如している宗教的寛容さが滲み出ており、平和の兆しが見出せる。

(3) オセロの主流社会への同化と男性中心主義の限界

モリスンの『デズデモーナ』では、オセロが男性社会の一員となるプロセスにおいて男性同士で共犯関係を結び、女性を力で支配し抑圧する様子が描かれている。オセロは主流社会の一員として受け入れられるように振舞っていくうちに、本来持っていた多様性を失い、人間性を喪失する。彼は、幼少時代に親を亡くして孤児となり、「薬草や根っこや花」(31)を収集して民間医療に携わっていた女性に育てられ、自然への畏敬の念を感じながら暮らしていた。しかし、シリア人によって誘拐されて軍隊に売られてからは、戦場で勇敢に戦うことに価値を見出し、力による支配構造の中に

組み込まれていく。それでも最初のうちは、戦で訪れた地で、多様な人々との交流を深めていた。彼は、カメレオンのように色を変えることができ、人間のようにしゃべる鳥や、頭のない島人や、アマゾンと呼ばれる女性兵士たちなど近代のヨーロッパ社会の基準からは逸脱した存在との出会いを体験しているが、そのような他者の存在を否定しようとはしていない。このことは、オセロがかつては色彩豊かな多様な文化を受け入れる柔軟性を持っていたことを示している。

しかし、オセロは兵士としてのキャリアを積み、ヴェニスで傭兵として雇用されてからは、主流社会の価値観に同化することをめざした。つまり男性中心主義的な価値観のもと、自らを有能で信頼に値する兵士として証明する必要がある、その肉体的な強さを強調するがゆえに、女性に対しても暴力的な行動を取るようになってしまう。彼は、男性中心的な力による支配を当然のこととする価値観に囚われてしまったのだ。

戦争という力にものを言わせる世界の男性性が端的に現れているのが、旗手のイアーゴと共謀してオセロが、二人の高齢の女性をレイプする場面である。オセロはこのレイプを回想して、デズデモーナに次のように告白する。

イアーゴと私は、流血で興奮したまま、食べ物や飲み物を探して馬小屋に入った。私たちが見つけたのはすくんだ二人の女だった。二人は、最初にちらりとこちらを見たあと、もう二度と目を向けることはなかった。視線を下げてしくしく泣いていた。二人は年老いていた、非常に老齢だった。何年にもわたる過酷な労働で指は節くれ立っていた。歯もまばらで体は柔らかく衰えているところだった。無理もない。私たちは代わる代わる喉の渇きよりも股間の乾きを満たした。それがどれだけ続いたのか覚えていない。(37)

さらに「もうこれ以上害を及ぼさないと決める前に、秘密の意思の交換があつて [イアーゴと] 目が合った」(38)とオセロはデズデモーナに語る。彼女から「羞恥心の交換」があつたのかと問われ、

それを否定はしないが、彼がイアーゴと目配せを交わした本当の理由は、二人の女性をレイブした「楽しみ」を共有したことにあつたと明かす。戦争という男性だけの空間で命がけの戦いを終えたオセロとイアーゴは、戦の延長線上に二人の女性を置き、二人の人間性を無視し、むしろ戦利品としてとらえていたのだ。しかし、このような男性中心の関係は長続きせず、結果的にオセロはイアーゴの策略により妻のデズデモーナを殺害し、自ら命を絶つ。

6. 舞台演出に見るマイノリティの可視化

『デズデモーナ』の舞台演出では、徹底的にマイノリティの存在が強調されている。死後の世界を舞台とした『デズデモーナ』では、現世の即物的な価値観を否定するかのように、装飾的で大掛かりな舞台装置は存在しない(図2)⁽¹²⁾。

さらに、『デズデモーナ』では、中心となる役者は、音楽(ギター、ボーカル)を担当しながらバーバリー／ソアンを演じるロキア・トラオーレと、主としてデズデモーナ役を演じるティナ・ベンコーの二人の女性だけであり、男性の役者は登場せず、女性を中心に据えた空間が作られている。この二人に加えて舞台上がるのは、マリ出身の

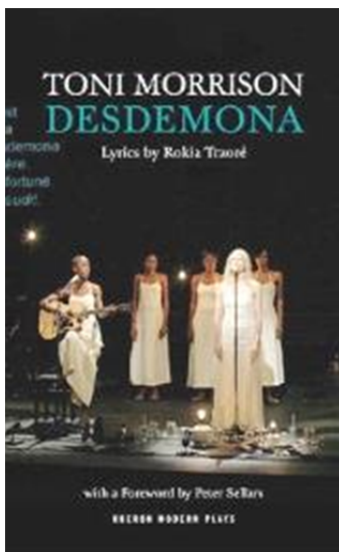
コーラスの女性ファティーマ・クオヤーテとヴァージニー・デンベール、そして同じくマリ出身のミュージシャンで、マリの伝統的な弦楽器を演奏するママ・ディアバーテとハーブの一種であるコラを演奏するトゥマーニ・クヤーテである。これらの役者とミュージシャンが、薄暗い電球の明かりによって照らし出され、舞台上に登場する。あたかもこれまで闇に追いやられて、不可視とされていたマイノリティの人々、すなわちアフリカ系の人々や女性の存在に光が照射され、彼(女)たちが闇から浮かび上がるような演出効果だと言える。

トラオーレがマリの言語バンパーラ語で力強く歌う歌は、イギリスによる帝国主義に対する象徴的な抵抗の手段としても解釈できる。植民地主義の下、沈黙を強いられた人々の声を取り戻すかのようにトラオーレは、植民地主義を推し進めた支配者の言語である英語や、マリを長い間支配していたフランス人の言語ではなく、母語のバンパーラ語でバーバリー／ソアンを演じ、植民地主義による支配構造の転換を意図していると解釈できる。さらにトラオーレの存在を際立たせているのが、コーラスのファティーマ・クオヤーテとヴァージニー・デンベールである。彼女たちは、トラオーレがマリで主催する音楽学校の受講生であり、『デズデモーナ』の出演を通して、国際的な舞台に立つことになった。トラオーレは、マリの女性がアフリカを越えてヨーロッパやアメリカなどでグローバルに活躍できる機会を得たことを喜んでいと述べているが⁽¹³⁾、これらのアフリカ出身の女性たちの存在は、近代以降の白人中心の価値観の修正を促すきっかけとなっている。

デズデモーナ役のティナ・ベンコーの存在も差異を超越する存在である。ベンコーは白人女性であるが、一人で、オセロやソウン、ブラバンショー夫人の台詞も担当したことは特筆に価する。声色を変えて異なった役を演じるベンコーは、人種やジェンダー、階級、宗教といった差異を超越する存在とも言えるだろう。

しかも、『デズデモーナ』に出演する役者たちの衣装は、これまでのシェイクスピアの『オセロ』

図2 『デズデモーナ』(Desdemona) の書影



に登場する役者たちが身に着けていたものとは大きく異なる。『デズデモーナ』では、ロキア・トラオーレもティナ・ベンコーも、そしてコーラスの女性たちも、全員がマリで織られた白い生地で作られていた、装飾を一切排した白のシンプルなストラップドレスを身に着けている。このことは、シオリーノが指摘するように、デズデモーナとバーバリー／サランが死後の世界で対等な存在として出会ったこと意味する (Sciolino)。このように衣装からも、白人と黒人の差異を視覚的に超越した空間を創造しようとする演出の意図が伝わってくる。

デイリーダーが指摘するように、シェイクスピア演劇を担ってきたイギリスのロイヤルシェイクスピア劇団では、長い間白人のみが役者として起用され、黒人のオセロ役でさえ、白人が顔を黒く塗って演じることが多かった (Daileader 177) ⁽¹⁴⁾。しかし、モリスンの『デズデモーナ』の舞台は、見える形で、文化や肌の色の差を超越する空間が作られている。まさにモリスンがもくろんだとおりの「人種が問題とはならない」スペース構築の可能性を秘めた舞台が繰り広げられたと言える。

おわりに

現実のアメリカ社会では、冒頭に述べたように人種主義に基づく暴力事件が頻発している。このような暴力の根幹にある人種意識が、実は近代以降に白人が植民地支配を進める上で自分たちの都合の良いように作り上げたという事実は、これまでほとんど議論されることがなかった。モリスンはシェイクスピアの『オセロ』を再読して、植民地支配が強まる中で不可視とされたアフリカの人々の存在を可視化し、声を奪われた人々の物語を想像／創造することで『デズデモーナ』を著わした。この作品を通して、白人が自己中心的な支配体系を構築するために、「肌の色に価値と意味を持たせた」 (Morrison, *Playing in the Dark* 49) 人種主義の根拠が根底から見直されているのだ。

最近の遺伝学研究では、人種は近代以降、ヨーロッパ人の征服が始まったときに、白人支配を正

当化するために有色人種に対して押し付けられた文化化的介入であるとされている。この近代以降の白人優位の人種概念の恣意性を、文学の世界で証明しようとしているのがモリスンの『デズデモーナ』である。活字に留まらず、演劇という視覚的な舞台で再現される『デズデモーナ』は、人種の差異の超越が見える形で表現しており、まさに「人種が問題とはならない世界」を構築しようとするモリスンの画期的な実験とも言えるだろう。

アメリカでは、2000年に実施された国勢調査から人種を複数選べるようになった。調査の結果、推定人口約2億8千万人のうち、680万人のアメリカ人が複数の人種を選択したと言われている⁽¹⁵⁾。割合で言えば、全人口の2.4%だが、18歳未満では4.2%という数字になっており、若い世代になるにつれ、混血化が進んでいると言える。さらに、2010年に実施された国勢調査では、異人種間のカップルの世帯が、2000年の8%から10%に増加したことが指摘されている⁽¹⁶⁾。今後、人種の混交がさらに進めば、ますます「人種」の定義が曖昧になっていくと考えられる。そのような流れの中で、白人の血統の純粋性を主張する人々がいることも否定できない。さまざまな人種言説がせめぎあう中で、モリスンは、将来を担う世代に人種の先入観を拭き去り、人種が持つ差別的、否定的な含蓄を取り去って、多様で人間性を豊かにしてくれる人種が問題とはならない世界の可能性を示していると言えるだろう。

*本稿は、日本アメリカ文学会中部支部6月例会(2016年6月18日、愛知大学)における研究発表「越境するトニ・モリスンの『デズデモーナ』」に修正を施したものであり、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)50299286)(代表者、森あおい)の助成を受けている。

注

(1) 本論では、これらの人々をアフリカ系アメリカ人、

- あるいは黒人と表記することにする。
- (2) 英語文献の引用については、翻訳がある場合はそれを参照し、必要に応じて改訳した。翻訳がないものについては、筆者による訳である。
 - (3) 竹沢泰子編の『人種概念の普遍性を問う』には、人種主義の根幹にある人種概念を歴史的に問い直す興味深い論文が収められている。
 - (4) シェイクスピアの四大悲劇の一つ。1602年作、1604年頃初演。ムーア人の将軍オセロは部下イアゴの策略に乗せられて妻デズデモーナの貞操を疑い、殺害するが、真相を知って自殺する。
 - (5) 主に警察が、人種や年齢などによって調査対象を絞って捜査を行うこと。黒人青年がその対象になることが多く、捜査令状がないにも拘わらず不当な尋問や身体捜査が往々にして行われており、人種差別的だと批判されている。
 - (6) モリスンはこの手紙で、オバマが他者理解と共存のための対話を推進し、権威主義に屈しない民主主義に基づいた政治を行ってくれる可能性を持っていると述べている。手紙の内容の詳細については、“Morrison’s Letter to Barack Obama”を参照のこと。
 - (7) 1870年には、憲法修正15条が発布され、黒人の選挙権が認められ、それまでアメリカ国民としてみなされていなかったアフリカ系アメリカ人の政界進出が可能になり、多くの政治家が誕生した。歴史家のフォナーによれば、再建期の時代には優に600人以上のアフリカ系アメリカ人が、地方や中央の行政府の議員として活躍していたと言う(Foner 151)。しかし、特に南部ではこれらの人々の活躍を快く思わない白人も数多くいた。
 - (8) Scholastic Aptitude Testの略。大学進学希望者を対象に行われる米国の共通試験。
 - (9) *OED*によれば、“barbary”は、「未開人(barbarian)の土地」を意味するアラビア語の *barbar* や *berber* に由来し、アラブの地理学者たちが北アフリカやエジプト南部に居住する人々を指すのに用いた言葉であった。
 - (10) 作者不詳。1600年頃に描かれたこの肖像画は、2012年7月19日から11月25日にかけて大英博物館で開催された「世界を舞台にして」(“Staging the World”)というタイトルの特別展でオセロのモデルとして展示された。詳細は、以下の記事を参照のこと。
“Shakespeare: Staging the World: how the British Museum’s superb exhibition catalogue brought the Bard to life.”
 - (11) マーク・コナーは、モリスンの作品(『マーシー』)における地名と命名権の間にある権力構造を読み解き、名前の付与が、その土地が本来持っていた名前を奪い、自分の力を誇示する行為であると読み解いている(150)。
 - (12) 舞台についての記述は、筆者が観劇の機会を得たカリフォルニア大学ロサンゼルス校のフロイド劇場で

の『デズデモーナ』の公演(2015年10月11日)に基づいている。

- (13) ニューヨークでの『デズデモーナ』の公演に先立って行われた NPR 系のラジオ局の番組でのトラオールの発言より(“Rokia Traoré Gives NY Premiere”)
- (14) 白人でオセロを演じた俳優としては、ローレンス・オリヴィエが有名である。ちなみに、アフリカ系アメリカ人の俳優ポール・ロブソンは、人種差別的なアメリカの舞台ではオセロ役を演じることができず、1930年にイギリスに渡り、ようやくオセロを演じるチャンスを得た。彼がアメリカでオセロ役を演じることができたのは、1943年になってのことであった。
- (15) 2000年の国勢調査における人種の選択肢に関する詳細については、“The Two or More Races Population: 2000”を参照のこと。
- (16) 2010年の国勢調査における異人種間の世帯数の詳細については、“2010 Census Shows Interracial and Interethnic Married Couples Grew by 28 Percent over Decade”を参照のこと。

引用文献

- Abd el-Ouahed ben Messaoud ben Mohammed Anoun, Moorish Ambassador to Queen Elizabeth. 1600.*
“Barbary.” *Oxford English Dictionary Online*. 10 Aug. 2015, <http://www.oed.com/view/Entry/154400?redirectedFrom=barbary#eid>.
- Conner, Marc C. “‘What lay Beneath the Names’: The Language and Landscapes of *A Mercy*.” *Toni Morrison: Paradise, Love, A Mercy*. Ed. Lucille P. Fultz. Bloomsbury, 2013.
- Daileader, Celia R. “Casting Black Actors: Beyond Othellophilia.” *Shakespeare and Race*. Ed. Catherine M. S. Alexander. Cambridge UP, 2000.
- Foner, Eric. *A Short History of Reconstruction, 1863–1877*. Harper & Row, 1990.
- Harris, Bernard. “A Portrait of a Moor.” *Shakespeare and Race*. Ed. Catherine M. S. Alexander. Cambridge UP, 2000.
- Lowe, Kate. “The Stereotyping of Black Africans in Renaissance Europe.” *Black Africans in Renaissance Europe*. Cambridge UP, 2005.
- Morrison, Toni. *Desdemona*. Oberon Books, 2012.
- . “Home.” *House That Race Built: Black Americans, U. S. Terrain*. Ed. Wahneema H. Lubiano, 3–12. Pantheon, 1997.
- . *A Mercy*. New York: Knopf, 2008. (『マーシー』大社淑子訳 早川書房 2010.)
- . “Morrison’s Letter to Barack Obama.” *The New York Observer*. 28 Jan 2008, www.observer.com/2008/toni-morrison-letters-to-barack-obama.
- . *Playing in the Dark*. Harvard UP, 1992. (『白さと想像力—アメリカ文学の黒人像』大社淑子訳 朝日新聞

社 1994.)

- . and Emma Brockes. “Toni Morrison: ‘I Want to Feel What I Feel. Even If It’s not happiness.’” Interview. *Guardian.co.uk*. 13 Apr 2012, www.guardian.co.uk/books/2012/apr/13/toni-morrison-home-son-love.
- Obama, Barack. “Victory Speech.” BBC News Online, 5 Nov. 2008, http://news.bbc.co.uk/2/hi/americas/us_elections_2008/7710038.stm.
- “Rokia Traoré Gives NY Premiere of ‘Desdemona,’ Collaboration with Toni Morrison, Peter Sellars, at Lincoln Center.” Nonesuch. 2 Nov. 2011, www.nonesuch.com/journal/rokiat-raore-gives-ny-premiere-desdemona-collaboration-toni-morrison-peter-sellars-lincoln-center-2011-11-02.
- Sciolino, Elaine. “‘Desdemona’ Talks Back to ‘Othello’”. *The New York Times* 25 Oct. 2011, <http://search.proquest.com/docview/900471916/91E60F59E1884B9BPQ/1?accountid=26265>.
- Sellers, Peter. Foreword. *Desdemona*. London: Oberon Books, 2012.
- “Shakespeare: Staging the World: How the British Museum’s Superb Exhibition Catalogue Brought the Bard to Life.” *The Telegraph*, 20 July 2012, www.telegraph.co.uk/culture/art/art-features/9414841/Shakespeare-Staging-the-World-how-the-British-Museums-superb-exhibition-catalogue-brought-the-Bard-to-life.html.
- Shakespeare, William. *Othello, the Moor of Venice*. 1602. Ed. Stanley Wells. Oxford UP, 2008.
- Steele, Stelby. “Obama’s post-racial promise.” *Los Angeles Times* 5 Nov 2008, www.latimes.com/news/print/edition/opinion/la-oe-steele5-2008nov05,0,1642069.story, Nov. 14, 2008.
- Taylor, Keeanga-Yamahtta. *From #BlackLivesMatter to Black Liberation*. Haymarket Books, 2016.
- “2010 Census Shows Interracial and Interethnic Married Couples Grew by 28 Percent over Decade.” United States Census, 15 Aug. 2016, www.census.gov/newsroom/releases/archives/2010_census/cb12-68.html.
- “The Two or More Races Population: 2000.” United States Census 2000, 15 Aug. 2016, www.census.gov/prod/2001pubs/c2kbr01-6.pdf#search=%272000+USA+census+multiple+choice+race%27.
- 竹沢泰子「人種概念の包括的理解に向けて」『人種概念の普遍性を問う』人文書院 2005, 13-109.